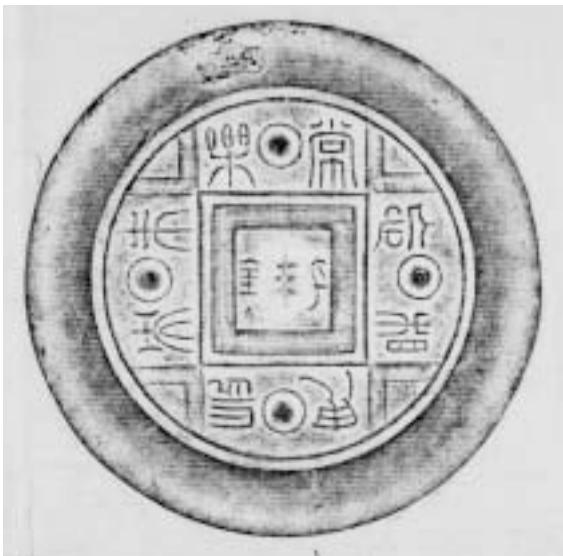


漢・吉語鏡銘

(前漢・紀元前
一世紀頃)



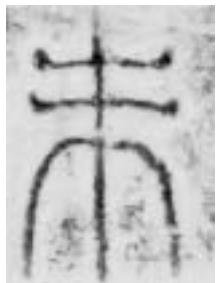
常樂未央 長母相忘（縮小）

相

長

未

常

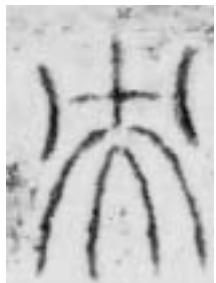
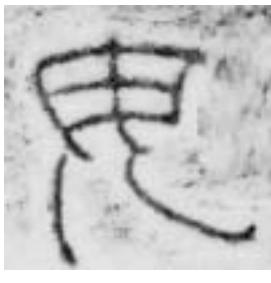


忘

母

央

樂



古典碑帖の窓⑩

木
鶴

木雞室

伊藤 滋

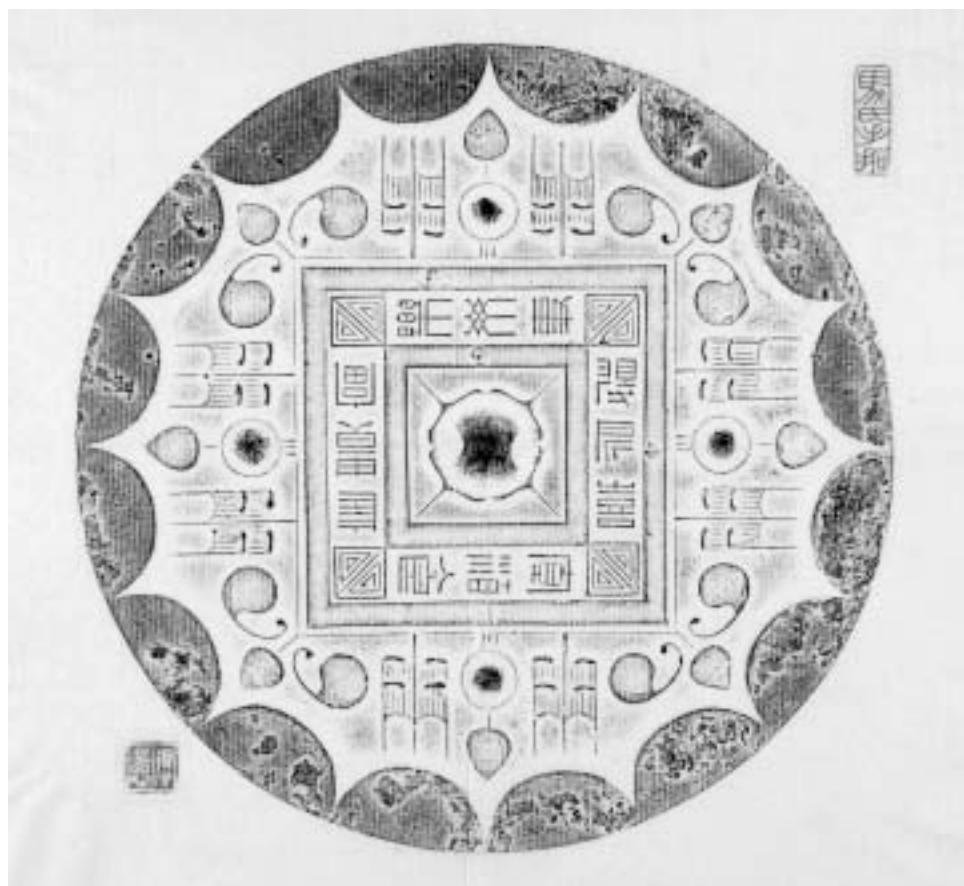
紀元前一世紀頃の御田出度い語句
が刻された銅鏡の文字の拓本です。

漢時代の鏡は、非常に多く出土しています。青銅を溶かして鋳造されたものですが、精巧な作りです。銘文の多くは篆書体ですが、時には隸書の八分体の波磔をもつものもあります。図版の二種は共に吉祥語です。

左は三字句、四句からなり、右は四字句、二句からなります。それぞれ正方形の辺上に左の銘文は右回りに、右の銘文は左回りに文字が布置されています。共に書体は篆書ですが、右の銘文は少し柔らかな曲線で、毛筆の趣を示しています。左は主に直線で構成され鋭く、やや固い書風です。

明けましておめでとうございます。
巻頭のこの欄を担当させていただいて、
四年が過ぎました。碑法帖の古典研究
するものとしては、勉強の場を与えて
いたいたことに感謝しております。
毎号どのようなテーマを選ぶかで苦労
しています。この欄に関するご批評、
ご意見、ご希望、ご質問などをお聞か
せください。私宛に直接メールで、ま
た編集部宛にお送りいただければ幸いで
す。伊藤 滋
mokkei@galaxy.ocn.ne.jp

樂母事 得所喜 宜酒食 長貴富 (縮小)



樂

母
事

得

所

喜

長
貴
富
宜
酒
食
樂
母
事

宜

酒

食

母

長

貴

富

長
貴
富
宜
酒
食
樂
母
事

書道藝術院 平成の書(2010)

2008
書道藝術院秋季展出品作



100×100cm

「風
雪」



浜 谷 芳 仙

財団法人書道藝術院
常務理事

書在りて炎と命

百姓育ちの五男坊が、泥中蓮華に魂萌えて、猛き書の美を究めんと60有余年。今、御光が見えかくれする。

5月25日の仏滅の日であった。新湊退職公務員連盟から、傘寿の賀寿記念品が届き、もうそんな年になつたのかと先行きが思いやられた。そして、戦前・戦後の激動期を生き抜いてきたことや様々な抵抗を克服しながら書作を継続してきた過程が、とても懐かしく思われた。

昭和25年、教職の身であることから、戦後の書作活動の方向を模索していたときに、玄土社の表立雲を知る。また、それが縁で、富山で前衛書の旗手である大澤雅休や竹胎、それに、世界的版画家として知名度の高い棟方志功らと一夜を明かし、多くの感化を受けて、第5回書道藝術院展に初出品したこと思い起こす。戦中、若い血潮の予科練に憧れて生きた者だけに、原爆とか水爆とか時の話題を素材として、我武者羅に作品を作して満足していた。その頃は、如何に巧みに書くかと技法に終始し、目先の変化しか考えなかつた浅学な私の人生経験である。

永い下積みから立ち上がり、書を生涯のものと決したのは深松海月、中島邑水との出会いからである。古典研究を第一義に、そこから文字の源流を遡って書の根源を学ぶべきだと、二人の師の書に対する熱い思想に共感して書に一生を尽くそうと教職を辞す。

以来、厳しい芸術の世界で懸命に努力してきたが、時は限りなく進み行く。前衛書でよく文字性・非文字性とかを論じられてきたけれど、今や空間造形の多様化によって、現状に対応しきれないものが多々あり、幅広い創作に門戸を開く時代に進化している。芸術の道は決して甘くはない。それだけに常に斬新な試行で、自分の書を表現できるよう老体に鞭打っている。長寿の心得に「80歳でお迎えに来たら、なんのなんのまだまだ役立つと云つてやれ」と記されてある。

年頭のことば

「歴史とは変化である」といった人がある。

悠久の時の流れの中で人は試行錯誤を繰り返しつつ一生けんめいに生きている。

二十一世紀も十年目を迎える

今年は寅（とら）の年
虎のように強く逞しく出発しよう。

先人の書への情熱を
継承していこう。

一〇一〇年一月

平成二二年正月

庚寅（かのえ・とら）



書のひろば

理事長 恩地春洋

伊藤滋先生の 古典碑法帖の窓

—好評継続の予定—

王羲之の書に真蹟はない。蘭亭序にしても、双鈎填墨本か、大家が臨書したものだ。「書道芸術」に掲載される法帖が、どこからとられたものかわからんでは困る。資料として伊藤滋先生を紹介していただき、巻頭に古い金石碑法帖を紹介して頂いて、もう四年になります。本年度は、各法帖を中心、同時代の他の碑帖との比較研究まで踏み込んで、わかり易い解説を頂いております。

過去発表されたものを碑法帖名のみ紹介しておきます。

- 1 木雞室金石書画拾遺 H18
- 1 瓦当文 2 開皇本蘭亭序
- 3 龍門造像記 4 美人董鐸氏墓誌銘 5 晉祠銘 6 顏勤禮碑
- 7 権量銘 8 張遷碑
- 9 宣示表 10 餘清齋本十七帖
- 11 鄭道昭・題字 12 雁塔聖教序記
- H 19
- 1 二十四字吉語博
- 1 庭經 3 番寶子碑
- 4 劉珠墓誌
- 2 心太平本黃

11	9	7	5	魏文朗造像	6	枯樹賦
刑徒塼		8		古銅鏡		
袁博碑	10			孔雀碑		

12	10	8	6	神龍本蘭亭序	7	大孟鼎
						刑徒塼
						袁博碑

二、碑法帖拾遺 H20

3	1	漢・十六字碑	2	房玄齡碑	4	伯夷叔齊墓碑	5	顏氏家廟碑	6	東方朔画贊碑	7	小字麻姑仙壇記	8	伊闐佛龕碑	9	同州聖教序	10	定武本蘭亭序	11	神龍半印本蘭亭序	12	穎上本蘭亭序	13	高貞碑	14	曹全碑	15	道匠造像記	16	皇甫誕碑	17	蘇孝慈墓誌	18	斐鏡民碑	19	曹子建碑	20	等慈寺碑	21	孝經	22	定武本蘭亭序	23	穎上本蘭亭序	24	高貞碑	25	曹全碑	26	道匠造像記	27	皇甫誕碑	28	蘇孝慈墓誌	29	斐鏡民碑	30	曹子建碑	31	等慈寺碑	32	孝經	33	定武本蘭亭序	34	穎上本蘭亭序	35	高貞碑	36	曹全碑	37	道匠造像記	38	皇甫誕碑	39	蘇孝慈墓誌	40	斐鏡民碑	41	曹子建碑	42	等慈寺碑	43	孝經	44	定武本蘭亭序	45	穎上本蘭亭序	46	高貞碑	47	曹全碑	48	道匠造像記	49	皇甫誕碑	50	蘇孝慈墓誌	51	斐鏡民碑	52	曹子建碑	53	等慈寺碑	54	孝經	55	定武本蘭亭序	56	穎上本蘭亭序	57	高貞碑	58	曹全碑	59	道匠造像記	60	皇甫誕碑	61	蘇孝慈墓誌	62	斐鏡民碑	63	曹子建碑	64	等慈寺碑	65	孝經	66	定武本蘭亭序	67	穎上本蘭亭序	68	高貞碑	69	曹全碑	70	道匠造像記	71	皇甫誕碑	72	蘇孝慈墓誌	73	斐鏡民碑	74	曹子建碑	75	等慈寺碑	76	孝經	77	定武本蘭亭序	78	穎上本蘭亭序	79	高貞碑	80	曹全碑	81	道匠造像記	82	皇甫誕碑	83	蘇孝慈墓誌	84	斐鏡民碑	85	曹子建碑	86	等慈寺碑	87	孝經	88	定武本蘭亭序	89	穎上本蘭亭序	90	高貞碑	91	曹全碑	92	道匠造像記	93	皇甫誕碑	94	蘇孝慈墓誌	95	斐鏡民碑	96	曹子建碑	97	等慈寺碑	98	孝經	99	定武本蘭亭序	100	穎上本蘭亭序	101	高貞碑	102	曹全碑	103	道匠造像記	104	皇甫誕碑	105	蘇孝慈墓誌	106	斐鏡民碑	107	曹子建碑	108	等慈寺碑	109	孝經	110	定武本蘭亭序	111	穎上本蘭亭序	112	高貞碑	113	曹全碑	114	道匠造像記	115	皇甫誕碑	116	蘇孝慈墓誌	117	斐鏡民碑	118	曹子建碑	119	等慈寺碑	120	孝經	121	定武本蘭亭序	122	穎上本蘭亭序	123	高貞碑	124	曹全碑	125	道匠造像記	126	皇甫誕碑	127	蘇孝慈墓誌	128	斐鏡民碑	129	曹子建碑	130	等慈寺碑	131	孝經	132	定武本蘭亭序	133	穎上本蘭亭序	134	高貞碑	135	曹全碑	136	道匠造像記	137	皇甫誕碑	138	蘇孝慈墓誌	139	斐鏡民碑	140	曹子建碑	141	等慈寺碑	142	孝經	143	定武本蘭亭序	144	穎上本蘭亭序	145	高貞碑	146	曹全碑	147	道匠造像記	148	皇甫誕碑	149	蘇孝慈墓誌	150	斐鏡民碑	151	曹子建碑	152	等慈寺碑	153	孝經	154	定武本蘭亭序	155	穎上本蘭亭序	156	高貞碑	157	曹全碑	158	道匠造像記	159	皇甫誕碑	160	蘇孝慈墓誌	161	斐鏡民碑	162	曹子建碑	163	等慈寺碑	164	孝經	165	定武本蘭亭序	166	穎上本蘭亭序	167	高貞碑	168	曹全碑	169	道匠造像記	170	皇甫誕碑	171	蘇孝慈墓誌	172	斐鏡民碑	173	曹子建碑	174	等慈寺碑	175	孝經	176	定武本蘭亭序	177	穎上本蘭亭序	178	高貞碑	179	曹全碑	180	道匠造像記	181	皇甫誕碑	182	蘇孝慈墓誌	183	斐鏡民碑	184	曹子建碑	185	等慈寺碑	186	孝經	187	定武本蘭亭序	188	穎上本蘭亭序	189	高貞碑	190	曹全碑	191	道匠造像記	192	皇甫誕碑	193	蘇孝慈墓誌	194	斐鏡民碑	195	曹子建碑	196	等慈寺碑	197	孝經	198	定武本蘭亭序	199	穎上本蘭亭序	200	高貞碑	201	曹全碑	202	道匠造像記	203	皇甫誕碑	204	蘇孝慈墓誌	205	斐鏡民碑	206	曹子建碑	207	等慈寺碑	208	孝經	209	定武本蘭亭序	210	穎上本蘭亭序	211	高貞碑	212	曹全碑	213	道匠造像記	214	皇甫誕碑	215	蘇孝慈墓誌	216	斐鏡民碑	217	曹子建碑	218	等慈寺碑	219	孝經	220	定武本蘭亭序	221	穎上本蘭亭序	222	高貞碑	223	曹全碑	224	道匠造像記	225	皇甫誕碑	226	蘇孝慈墓誌	227	斐鏡民碑	228	曹子建碑	229	等慈寺碑	230	孝經	231	定武本蘭亭序	232	穎上本蘭亭序	233	高貞碑	234	曹全碑	235	道匠造像記	236	皇甫誕碑	237	蘇孝慈墓誌	238	斐鏡民碑	239	曹子建碑	240	等慈寺碑	241	孝經	242	定武本蘭亭序	243	穎上本蘭亭序	244	高貞碑	245	曹全碑	246	道匠造像記	247	皇甫誕碑	248	蘇孝慈墓誌	249	斐鏡民碑	250	曹子建碑	251	等慈寺碑	252	孝經	253	定武本蘭亭序	254	穎上本蘭亭序	255	高貞碑	256	曹全碑	257	道匠造像記	258	皇甫誕碑	259	蘇孝慈墓誌	260	斐鏡民碑	261	曹子建碑	262	等慈寺碑	263	孝經	264	定武本蘭亭序	265	穎上本蘭亭序	266	高貞碑	267	曹全碑	268	道匠造像記	269	皇甫誕碑	270	蘇孝慈墓誌	271	斐鏡民碑	272	曹子建碑	273	等慈寺碑	274	孝經	275	定武本蘭亭序	276	穎上本蘭亭序	277	高貞碑	278	曹全碑	279	道匠造像記	280	皇甫誕碑	281	蘇孝慈墓誌	282	斐鏡民碑	283	曹子建碑	284	等慈寺碑	285	孝經	286	定武本蘭亭序	287	穎上本蘭亭序	288	高貞碑	289	曹全碑	290	道匠造像記	291	皇甫誕碑	292	蘇孝慈墓誌	293	斐鏡民碑	294	曹子建碑	295	等慈寺碑	296	孝經	297	定武本蘭亭序	298	穎上本蘭亭序	299	高貞碑	300	曹全碑	301	道匠造像記	302	皇甫誕碑	303	蘇孝慈墓誌	304	斐鏡民碑	305	曹子建碑	306	等慈寺碑	307	孝經	308	定武本蘭亭序	309	穎上本蘭亭序	310	高貞碑	311	曹全碑	312	道匠造像記	313	皇甫誕碑	314	蘇孝慈墓誌	315	斐鏡民碑	316	曹子建碑	317	等慈寺碑	318	孝經	319	定武本蘭亭序	320	穎上本蘭亭序	321	高貞碑	322	曹全碑	323	道匠造像記	324	皇甫誕碑	325	蘇孝慈墓誌	326	斐鏡民碑	327	曹子建碑	328	等慈寺碑	329	孝經	330	定武本蘭亭序	331	穎上本蘭亭序	332	高貞碑	333	曹全碑	334	道匠造像記	335	皇甫誕碑	336	蘇孝慈墓誌	337	斐鏡民碑	338	曹子建碑	339	等慈寺碑	340	孝經	341	定武本蘭亭序	342	穎上本蘭亭序	343	高貞碑	344	曹全碑	345	道匠造像記	346	皇甫誕碑	347	蘇孝慈墓誌	348	斐鏡民碑	349	曹子建碑	350	等慈寺碑	351	孝經	352	定武本蘭亭序	353	穎上本蘭亭序	354	高貞碑	355	曹全碑	356	道匠造像記	357	皇甫誕碑	358	蘇孝慈墓誌	359	斐鏡民碑	360	曹子建碑	361	等慈寺碑	362	孝經	363	定武本蘭亭序	364	穎上本蘭亭序	365	高貞碑	366	曹全碑	367	道匠造像記	368	皇甫誕碑	369	蘇孝慈墓誌	370	斐鏡民碑	371	曹子建碑	372	等慈寺碑	373	孝經	374	定武本蘭亭序	375	穎上本蘭亭序	376	高貞碑	377	曹全碑	378	道匠造像記	379	皇甫誕碑	380	蘇孝慈墓誌	381	斐鏡民碑	382	曹子建碑	383	等慈寺碑	384	孝經	385	定武本蘭亭序	386	穎上本蘭亭序	387	高貞碑	388	曹全碑	389	道匠造像記	390	皇甫誕碑	391	蘇孝慈墓誌	392	斐鏡民碑	393	曹子建碑	394	等慈寺碑	395	孝經	396	定武本蘭亭序	397	穎上本蘭亭序	398	高貞碑	399	曹全碑	400	道匠造像記	401	皇甫誕碑	402	蘇孝慈墓誌	403	斐鏡民碑	404	曹子建碑	405	等慈寺碑	406	孝經	407	定武本蘭亭序	408	穎上本蘭亭序	409	高貞碑	410	曹全碑	411	道匠造像記	412	皇甫誕碑	413	蘇孝慈墓誌	414	斐鏡民碑	415	曹子建碑	416	等慈寺碑	417	孝經	418	定武本蘭亭序	419	穎上本蘭亭序	420	高貞碑	421	曹全碑	422	道匠造像記	423	皇甫誕碑	424	蘇孝慈墓誌	425	斐鏡民碑	426	曹子建碑	427	等慈寺碑	428	孝經	429	定武本蘭亭序	430	穎上本蘭亭序	431	高貞碑	432	曹全碑	433	道匠造像記	434	皇甫誕碑	435	蘇孝慈墓誌	436	斐鏡民碑	437	曹子建碑	438	等慈寺碑	439	孝經	440	定武本蘭亭序	441	穎上本蘭亭序	442	高貞碑	443	曹全碑	444	道匠造像記	445	皇甫誕碑	446	蘇孝慈墓誌	447	斐鏡民碑	448	曹子建碑	449	等慈寺碑	450	孝經	451	定武本蘭亭序	452	穎上本蘭亭序	453	高貞碑	454	曹全碑	455	道匠造像記	456	皇甫誕碑	457	蘇孝慈墓誌	458	斐鏡民碑	459	曹子建碑	460	等慈寺碑	461	孝經	462	定武本蘭亭序	463	穎上本蘭亭序	464	高貞碑	465	曹全碑	466	道匠造像記	467	皇甫誕碑	468	蘇孝慈墓誌	469	斐鏡民碑	470	曹子建碑	471	等慈寺碑	472	孝經	473	定武本蘭亭序	474	穎上本蘭亭序	475	高貞碑	476	曹全碑	477	道匠造像記	478	皇甫誕碑	479	蘇孝慈墓誌	480	斐鏡民碑	481	曹子建碑	482	等慈寺碑	483	孝經	484	定武本蘭亭序	485	穎上本蘭亭序	486	高貞碑	487	曹全碑	488	道匠造像記	489	皇甫誕碑	490	蘇孝慈墓誌	491	斐鏡民碑	492	曹子建碑	493	等慈寺碑	494	孝經	495	定武本蘭亭序	496	穎上本蘭亭序	497	高貞碑	498	曹全碑	499	道匠造像記	500	皇甫誕碑	501	蘇孝慈墓誌	502	斐鏡民碑	503	曹子建碑	504	等慈寺碑	505	孝經	506	定武本蘭亭序	507	穎上本蘭亭序	508	高貞碑	509	曹全碑	510	道匠造像記	511	皇甫誕碑	512	蘇孝慈墓誌	513	斐鏡民碑	514	曹子建碑	515	等慈寺碑	516	孝經	517	定武本蘭亭序	518	穎上本蘭亭序	519	高貞碑	520	曹全碑	521	道匠造像記	522	皇甫誕碑	523	蘇孝慈墓誌	524	斐鏡民碑	525	曹子建碑	526	等慈寺碑	527	孝經	528	定武本蘭亭序	529	穎上本蘭亭序	530	高貞碑	531	曹全碑	532	道匠造像記	533	皇甫誕碑	534	蘇孝慈墓誌	535	斐鏡民碑	536	曹子建碑	537	等慈寺碑	538	孝經	539	定武本蘭亭序	540	穎上本蘭亭序	541	高貞碑	542	曹全碑	543	道匠造像記	544	皇甫誕碑	545	蘇孝慈墓誌	546	斐鏡民碑	547	曹子建碑	548	等慈寺碑	549	孝經	550	定武本蘭亭序	551	穎上本蘭亭序	552	高貞碑	553	曹全碑	554	道匠造像記	555	皇甫誕碑	556	蘇孝慈墓誌	557	斐鏡民碑	558	曹子建碑	559	等慈寺碑	560	孝經	561	定武本蘭亭序	562	穎上本蘭亭序	563	高貞碑	564	曹全碑	565	道匠造像記	566	皇甫誕碑	567	蘇孝慈墓誌	568	斐鏡民碑	569	曹子建碑	570	等慈寺碑	571	孝經	572	定武本蘭亭序	573	穎上本蘭亭序	574	高貞碑	575	曹全碑	576	道匠造像記	577	皇甫誕碑	578	蘇孝慈墓誌	579	斐鏡民碑	580	曹子建碑	581	等慈寺碑	582	孝經	583	定武本蘭亭序	584	穎上本蘭亭序	585	高貞碑	586	曹全碑	587	道匠造像記	588	皇甫誕碑	589	蘇孝慈墓誌	590	斐鏡民碑	591	曹子建碑	592	等慈寺碑	593	孝經	594	定武本蘭亭序	595	穎上本蘭亭序	596	高貞碑	597	曹全碑	598	道匠造像記	599	皇甫誕碑	600	蘇孝慈墓誌	601	斐鏡民碑	602	曹子建碑	603	等慈寺碑	604	孝經	605	定武本蘭亭序	606	穎上本蘭亭序	607	高貞碑	608	曹全碑	609	道匠造像記	610	皇甫誕碑	611	蘇孝慈墓誌	612	斐鏡民碑	613	曹子建碑	614	等慈寺碑	615	孝經	616	定武本蘭亭序	617	穎上本蘭亭序	618	高貞碑	619	曹全碑	620	道匠造像記	621	皇甫誕碑	622	蘇孝慈墓誌	623	斐鏡民碑	624	曹子建碑	625	等慈寺碑	626	孝經	627	定武本蘭亭序	628	穎上本蘭亭序	629	高貞碑	630	曹全碑	631	道匠造像記	632	皇甫誕碑	633

前衛書

(四)

千葉蒼玄



千葉蒼玄書



日本画には大観、春草らが編み出した
膚體と呼ばれる新しい表現の技法がある。
伝統的な線描を用いずに空刷毛
を用いてばかりことによって空氣や光
を主体とした作品表現はまれである。



書の線には“にじみ”と“かすれ”
という表現がある。ご存じのとおり淡
墨と渴筆の表現である。私たち書家は
是をさも当たり前のように使ってはい
るが、他の平面芸術の部門を眺めてみ
てもそれほど“にじみ”と“かすれ”
を主体とした作品表現はまれである。

日本画には大観、春草らが編み出した
膚體と呼ばれる新しい表現の技法がある。
伝統的な線描を用いずに空刷毛
を用いてばかりことによって空氣や光
を主体とした作品表現はまれである。

は、人体で言えば骨と肉の関
係に似ている。骨がしっかりと
していなければ形が崩れ落ち、
骨があつても肉がしっかりと
ついていなければ固い
だけの固まりになつて
しまう。

21世紀の書

—私の主張—

漢字 (四)

前田龍雲



前田龍雲書

写真の作品はコムサ・
アルチザンからの依頼
で北海道でのファッショ
ンショーのイベントに
出品したものである。
“粹”と“夢”という
二つの課題により制作
したが、“粹”は洋紙に淡墨
(に
じみ) で柔らかさと広がりを、
“夢”は超々鋒により濃墨(渴
筆) で強さと明るさを表現して
みた。会場ではモデルに混じっ
て揮毫したが、普段は味わった
ことがない経験が出来たと思つ
ている。

美を継ぐ者たち展Ⅱ (1990年) 出品作

書の線には“にじみ”と“かすれ”
という表現がある。ご存じのとおり淡
墨と渴筆の表現である。私たち書家は
是をさも当たり前のように使ってはい
るが、他の平面芸術の部門を眺めてみ
てもそれほど“にじみ”と“かすれ”
を主体とした作品表現はまれである。

日本画には大観、春草らが編み出した
膚體と呼ばれる新しい表現の技法がある。
伝統的な線描を用いずに空刷毛
を用いてばかりことによって空氣や光
を主体とした作品表現はまれである。

は、人体で言えば骨と肉の関
係に似ている。骨がしっかりと
していなければ形が崩れ落ち、
骨があつても肉がしっかりと
ついていなければ固い
だけの固まりになつて
しまう。

臨書をしていて以前から思う
ことは、余白の使い方が絶妙だ
ということ。
それには、文字の構成、つまり『形』。
そして『線』の強
弱さや深遠さの融合によって生
まれるもの。その当時の書き手
がそれを意識していたかどうか
はわからないのですが、鍛錬を
積んで無意識に余白の生きたも
のが出来たのであろうと思いま
す。

先日、成田で行われた単位認定講習
会でのことですが、前衛書の時間に素
晴らしい一本の線を書いた受講生がい
ました。余白も美しいと感じました。
偶然に書けたものでしあが、その様
子を見て、常に安定して所謂『良い線』
が書け、余白の効いた作品が無意識に
生まれるようになりたいものです。

これは、何も漢字に限ったことではないで
しょうし、書に限ったものでも
ないのは百も承知ですが、紙面に一つ
の輪郭をはっきりと見せずに広がり柔
らかさを表現したのに對し、後者は線
自体の存在感（この線の存在感が書に
とっては最も重要なだと考えるが）は、
はっきりと表現しにじみ・かすれによ
り空間への広がりと柔らかさ
を表ししようとしたものであ
る。

ば、一本の『線』を書いたときに端的に
表れるようになります。これは黒の
割合が多からうが少なかからうが言える
ことではないかと思います。ここに書
の面白さや難解さの原点があるのでし
ょ。

これは、何も漢字に限ったことではないで
しょうし、書に限ったものでも
ないのは百も承知ですが、紙面に一つ
の輪郭をはっきりと見せずに広がり柔
らかさを表現したのに對し、後者は線
自体の存在感（この線の存在感が書に
とっては最も重要なだと考えるが）は、
はっきりと表現しにじみ・かすれによ
り空間への広がりと柔らかさ
を表ししようとしたものであ
る。

これは、何も漢字に限ったことではないで
しょうし、書に限ったものでも
ないのは百も承知ですが、紙面に一つ
の輪郭をはっきりと見せずに広がり柔
らかさを表現したのに對し、後者は線
自体の存在感（この線の存在感が書に
とっては最も重要なだと考えるが）は、
はっきりと表現しにじみ・かすれによ
り空間への広がりと柔らかさ
を表ししようとしたものであ
る。

私を支えてくれた言葉

川 村 美 泉

(漢字部・審査会員)

「下手は下手なり。書き続けていた
ら何かが見えてくるんじゃない? 諦
めず、とにかく書き続けること。書き
続けていれば、きっと何かをつかむこ
とができると思うから。」

この原稿の依頼を受け、私が今まで
辿ってきた道を振り返った時、頭に浮
かんだのがこの言葉でした。

今から15年ほど前、私は聴覚に障害
のある子どもたちが在籍するろう学校
に勤務していました。その頃の私は、
大きな作品を制作することは殆どなく
書に関しては大変不勉強な毎日を送っ
ておりました。しかし、子どもたちを
前にコミュニケーションのとり方や手
話のことなど、試行錯誤しながら聴覚
障害を理解しようと思死の毎日でした。

冒頭の言葉は、そんな時期に美術の
先生が話してくださった言葉です。そ
の先生は、細かな観察による緻密な描
写、さまざまな表情や仕草、猿に恋を
しているのではないかと思われるほど
どんな時も猿の絵ばかり書いておら



川 村 美 泉 書

道を歩いていけるのかと悩んでおりま
した。
しかし、この美術の先生の言葉を聞
いた時、私ははっとし、何か明るい光
を灯されたような気持ちになりました。
下手は下手と認める、そして、そこか
ら新たに出発すればいい、そう聞こえ
たのです。

幸い、その後、私は高校時代からの
恩師に再び書を教えていただけるよう
になり、週に一度恩師の元へ通うよう
になりました。当時、私はそのことが不思
議でたまらず思い切ってたずねたので
す。「どうして猿ばかり書いておられ
るのですか?」そして、返ってきたのが
が冒頭の言葉です。

周囲の先輩方がどんどん素晴らしい
作品を見ては溜息をつき、自己否定ばかり
をしていました。忙しいことを理由
にして十分な努力もせず、書くことか
ら逃避していました。私には才能がな
いのではないか、この先もずっと書の

道を歩いていけるのかと悩んでおりま
した。
そして、第59回書道芸術院展で思
いがけず準大賞をいたぐことになりました。作品は 大字書の「遠」。こ
の作品は書いても書いても納得がいか
ず、1年間ずっと書き続けてきたもの
です。まだまだ足りないものを感じる
作品でしたが、自分の中に課題を持ち
挑戦し続けた「遠」が認められたこと
は、大きな喜びでした。同時に、これ
から審査会員のお仲間に入りていただ
く不安とが交錯したことでも確かです。
表彰式の時には、緊張と感動で足元が
ふらついたことを今でも昨日のことの
ように憶えています。

私は、多くの人に支えられて今日ま
で来ることができました。ある時、恩
地先生が、「賞をとるために作品を書
くのではありません。その時、その時
の自分の生き方を作品に残していくの
です。」そうおっしゃられました。人
として広く深い心、他を認める心を持
ち、あらゆることに感動し、感謝でき
る心を持つようになった時、そして
人のために尽くすことができるよう
なった時、自然の中、野に花がある
ような、気負いのない、気の充実した
存在感ある作品が書けるようになるの
だと信じています。

そこで思い出すのは、
やはり「下手は下手な
り…」の言葉。と
かく書いていれば、こ
んな私でも何かをつか
むことができるんだと
信じて続けてきました。

根気よく指導してください
さる恩師や先輩の気持
ちに何とか応えたいと
いう思いも、私を支え

ていました。
これからも書にたずさわることがで
きたしあわせをかみしめ、人として成
長させていただきながら、書に取り組
んでまいりたいと思います。

一粒の種

新行内 芳 蘭

(漢字部・審査会員)

「いつか、きっと書道をやろう」と

思い始めたのは、いつからだつたろ

うか。ただ、何がきっかけだったかは、

はっきりと覚えています。私が小学生

の時、旭市立共和小という小さい学校

でしたが、恵まれていたと思うのは、

長年、東絵画道会の会長でいらっしゃっ

た、今は亡き古橋飛山先生が当時教頭

先生で、お習字に大変力を入れて下さっ

たということです。全国学生展、白扇

書道展への出品、書き初め展の前など

ちに膨らんでいったのだと思いません。

結婚を機に、「そうだ書道をやろう」

と思っていたところ、市の広報紙に生

涯教育の一環として書道教室が新たに

始まるというのに目になりました。申し込

みました。第一回開講式の日、担当の

先生は加瀬澄春先生で、その隣に古橋

先生が、講師紹介の為に列席していらっ

しゃいました。その偶然にびっくり致

しました。加瀬先生は、古橋先生のお

弟子さんだったのです。それから早や

三十年近く、加瀬先生にご指導をいた

だいております。私は何かと他に興味

に立てることがうれしく思います。

今、私は自宅にて書道教室をやらせ

ていただいております。古橋先生に、

「書の楽しさの種」を聞いていただき

て、加瀬先生に根気強く育てていただき

ました。これからは、一人でも多く

の方にその種を、今度は私自身が説いて

てさしあげたらと思っております。

それには、これからも生涯を通して先生の

ご指導のもと、書道の勉強はもちろんのこと、

人としても精進して参りたいと思います。

のあるものを見つけては書道から脱線してしまったことが、ままありました。その都度先生は暖かく見守っていて下さいました。

白扇書道会では、種谷先生が、毎日

展と芸術院の前に研究会を開いて下さいます。加瀬先生が必ず誘って下さるので、ほとんど休まず参加してまいりました。時には準備ができず、作品をまだ書き始めてない時などは、足が重かった時もありましたが、「今日を

スタートにすればいいのよ」と、おっしゃる一言で気持ちも楽になりました。

思うように書けず、午前中だけで帰ろ

うなどと思った時も、先生方の熱心な

ご指導に最後まで頑張ることが出来た

りと、思えばいろいろな事があります

た。その一回一回に、今は亡き扇舟先

生はじめ、たくさんの先生方の、実際に

見せていただく揮毫は、目を見張る

思いがいたしました。そして作品に対するアドバイスの数々を書きとめてお

いたノートは、私にとっての宝物です。

平成12年、18年と白雪紅梅賞を二回

いただき、審査会員の仲間入りをさせていただきましたが、またができた今、加瀬先生のご指導をはじめ、研究会での諸先生方のご指導にあらためて感謝致します。

一年前より縁あって、旭中央病院の

シルバーケアセンターで、リハビリの

為の、書道、「お習字」を月一回教え

るというボランティアを引き継ぐこと

となりました。二人の生徒さんの協力を

いただき、約一時間余り、毎回30人

位の参加者です。いろいろな病気のハ

ンデと戦いながら一生懸命書く姿、そ

してしっかりと字、作品、を見るなど

たびに、大きなエネルギーを私の方が

いただいてくる思いがいたします。こ

の日を楽しみにしてらっしゃるなどと

聞きますと、書を通して少しでもお役

に立てることがうれしく思います。

今、私は自宅にて書道教室をやらせ



書道芸術院創立記念日 特別公開講演会

平成21年11月23日(月・祝)
於 上野精養軒

「対句の面白味」—楹聯の話—

講師 石川忠久先生

〈公開講演会〉

常務理事 辻元大雲

石川忠久先生講義



恩地理事長あいさつ

爽やかな秋晴れの好天に恵まれ、恒例となつた書道芸術院創立記念日特別講演会が、平成21年11月23日(月・祝)上野精養軒にて、漢詩研究の第一人者前二松学舎大学学長・湯島聖堂理事長の石川忠久先生を講師にお願いし、「対句の面白味＝楹聯の話＝」と題して開催された。

会場は定員200名、ほぼ満席で大盛況。

先生はNHKBSの「新漢詩紀行」に



もご出演されており人気の高い方だけにこの機会を楽しみに参加された方が多いと伺った。以前全日本書道連盟の講演会では蘭亭序をテーマにお話しただき、その折の軽妙かつ味わい深いご講演を伺った恩地理事長が特にお願ひして今回の講演をお引き受けいただき。期待に違わず先生のお話は軽妙な語り口と、時に中国語の流麗な朗詠で習させていただいた。

「対偶表現」として論語「学而不思則罔、思而不学則殆」や老子の対句「大道廢有仁義、智慧出有大偽」、李

さらに
「石見国如硯、竹生島似笙」
などを例に挙げられた。

「流水対」表現では、白居易の「古言草」五言律詩を引用し中一旬ずつ二対の対句表現を、「全対格」表現は杜甫の「登高」七言律詩のみことな対句表現の例を挙げられた。「杜甫草堂の楹聯」の例では草堂に掛けられた楹聯の例を五言、七言ほかで例示され、対句、楹聯の面白さを分かりやすくお話しいただいた。

講演終了後の懇親会にも先生に参加していただき、書道芸術院の誕生日をお祝いしていただいた。

当日午前には財団法人書道芸術院の理事・評議員会が開催され、本年度の行事遂行状況、63回全国学生書道展(22年7月末、奈良県文化会館)役員、64・65回書道芸術院展の基本計画の一
部変更(開催予定の千葉県立美術館借
館条件の変更などにより東北仙台展の
東日本展に一本化する)などを検討、

白の
「天地者万物之逆旅
光陰者百代之過客」
の表現を例に引かれた。

「対句」では「平仄」「四声」といった漢詩の成り立ちの原則と、发声の関係を具体的に中国語で朗々と謳いあられ、皆思わず引き込まれ、聞き惚れてしまう。和漢朗詠集・早春・都良香、「氣鬱風梳新柳髮

水消浪洗旧苔髪」

平成22年度年間行事予定などを承された。詳しく述べは「書道芸術」誌に院報として発表されるのでご参照いただきたい。

恩地理事長あいさつ

下谷洋子先生あいさつ

石川忠久先生の講演で、漢詩の面白さと中国語の発音のリズミカルで高音の綺麗な音色を堪能したあと、恒例の懇親会となつた。(詳しく述べは辻元先生の文を)

恩地春洋理事長の挨拶に始まり、小伏竹村先生の乾杯の音頭で和やかな中多数の方の参加でにぎやかな会となつた。

各総局支局長より来年の行事予定などが紹介された。今年は九州支局より北上し四国支局の大野先生から今年の



④金婚式おめでとうございます。

中村雅俊さん・香川倫子先生ご夫妻に辻元先生よりお祝いメッセージ



石川忠久(岳堂)先生 プロフィール

東京都出身
首都師範大学客員教授「中国北京」

同大学院博士課程修了、文学博士
同大学院文学部長等を歴任・名誉教授
二松学舎大学前学長・現顧問・名譽教授
財団法人斯文会(湯島聖堂)理事長
全国漢文教育学会会長
国際儒学聯合会副会長

漢字文化振興会専務理事
全日本漢詩連盟会長
NHKテレビ「新漢詩紀行」監修
主な著書

「新漢詩の世界」「新漢詩の風景」「漢詩の作り方」(以上大修館書店)
「漢詩紀行(一)~(五)」「春の詩」「○○選」「陶淵明○○選」
(以上NHK出版)「漢詩への招待」「漢詩鑑賞事典」(講談社・学術文庫)

があり、書道芸術院と共に歩まれた先生の歴史を感じた一時であった。書道芸術院展も来年で63回展、東京都美術館も改装工事のため64回65回と休館になる。また新しい1歩に向けて想いを新たにした。

昨年の講演会後の報告記事の
為、一部そのまま掲載して
あります。(今年・来年)



石川忠久先生

今年度、毎日書道顧彰芸術部門を受賞した辻元先生から御礼の挨拶があり、書道芸術院として大々的に芸術作家集団ということを外部に発信したことによる席上、辻元先生から中村雅俊さん・香川倫子先生の金婚式のうれしいお話を

〔解説〕祭姪文稿は、顔真卿の三稿（祭姪文稿・祭伯文稿・争座位稿）と呼ばれる中の唯一現存する真跡で、年若い姪の季明の忠魂を慰めた祭文の原稿である。現在は台北故宮博物院にある。帖は、白麻紙本であり、紙質は堅く、中鋒

剛毫を使用したといわれている。書法は、小細工を排した自然な用筆法が駆使され、二・三行と書き進むうちに連筆のリズムも整い、墨継ぎをくり返す頃には、感情の高まりと共にひたすら筆を走らせていく。

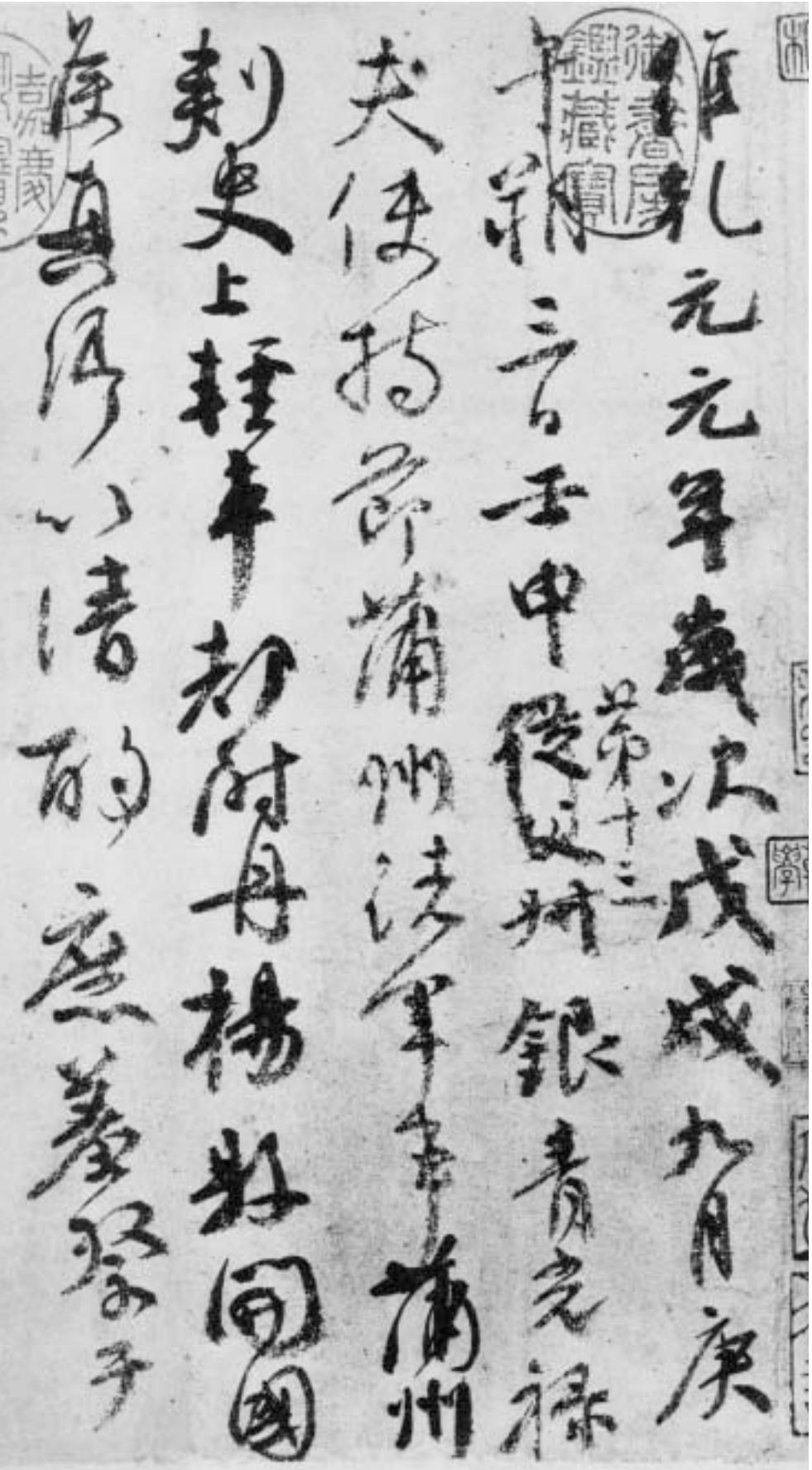
(編集部)

漢字研究部競書作品は、左の法帖の中から何文字臨書してもよい。

(掲載部分以外は不可)

※落款を必ず入れる
署名、もしくは○○臨

(押印のみ也可)



維乾元元年歲次戊戌九月庚午朔三日壬申第十三叔銀青光祿大夫使持節蒲州諸軍事蒲州刺史上輕車都尉丹楊縣開國侯真卿以清酌庶羞祭于

※上記の掲載歌一首以上を書く
用紙・半紙普通判(料紙可)

※落款を必ず入れる。
○○臨(押印のみも可)

七
者

惺半門

六
三

六番

元 恒乃代 や 狩、之不

お毛布美知爾馬登比

ぬ留可那

解説

おもむくはともに走
るよし

十五番歌合せの筆者は、藤原伊房とされ、平安時代の流れの中では、中期の終りか、後期の初めの位置にあたる。書写形式は一首を四行に大ぶりに書き、四行目は字数を少なくしている。連綿が少ないため、威風堂々とし、側筆を駆使しているのも独異な存在である。

(編集部)

習い方解説 (四)

辻元大雲

延壽萬歲
(延壽萬歲)

吉語



新年の吉語を隸書表現してみました。新しい年を書き、長寿を願う言葉です。

隸書体は色々な書風があり、味わい深い書体です。素朴な雰囲気の古隸といわれる古典には開通優れた刻石や魯孝王刻石、更に石門頌など磨崖碑の大らかさの魅力があり、八分隸には礼器碑や乙瑛碑など典型的な隸書筆法の確立からの安定感や気品があります。参考例は八分隸のやや骨格のしっかりした安定感ある表現としてみました。色々工夫研究をしてみて下さい。

習い方解説 (四)

小伏小扇

飛竜在天
(飛竜天に在り) 「易經」乾卦

才能のある人物が人の上に立つたとえ。

「飛」四筆目のたて画がこの字の

きめ手になる。他の画はたて画に添えるように。

「飞」
「飛」

「竜」 「龍」と旧漢字で書くことが多いが当用漢字体にした。

特に終筆の浮鶯を慎重に。

「在」 「土」の一部が右へ出るこ

とが重要な要素。

「天」二本のよこ画は軽やかに。

左払いは右払いに呼応して鋭く強く。



書体＝楷書

飛竜在天 よみ(飛竜天に在り)

習い方解説(四)

石井明子

雪ふれば木ことに花ぞさきにけ
るいづれを梅とわきてをらまし
(紀友則)

雪ふれば木

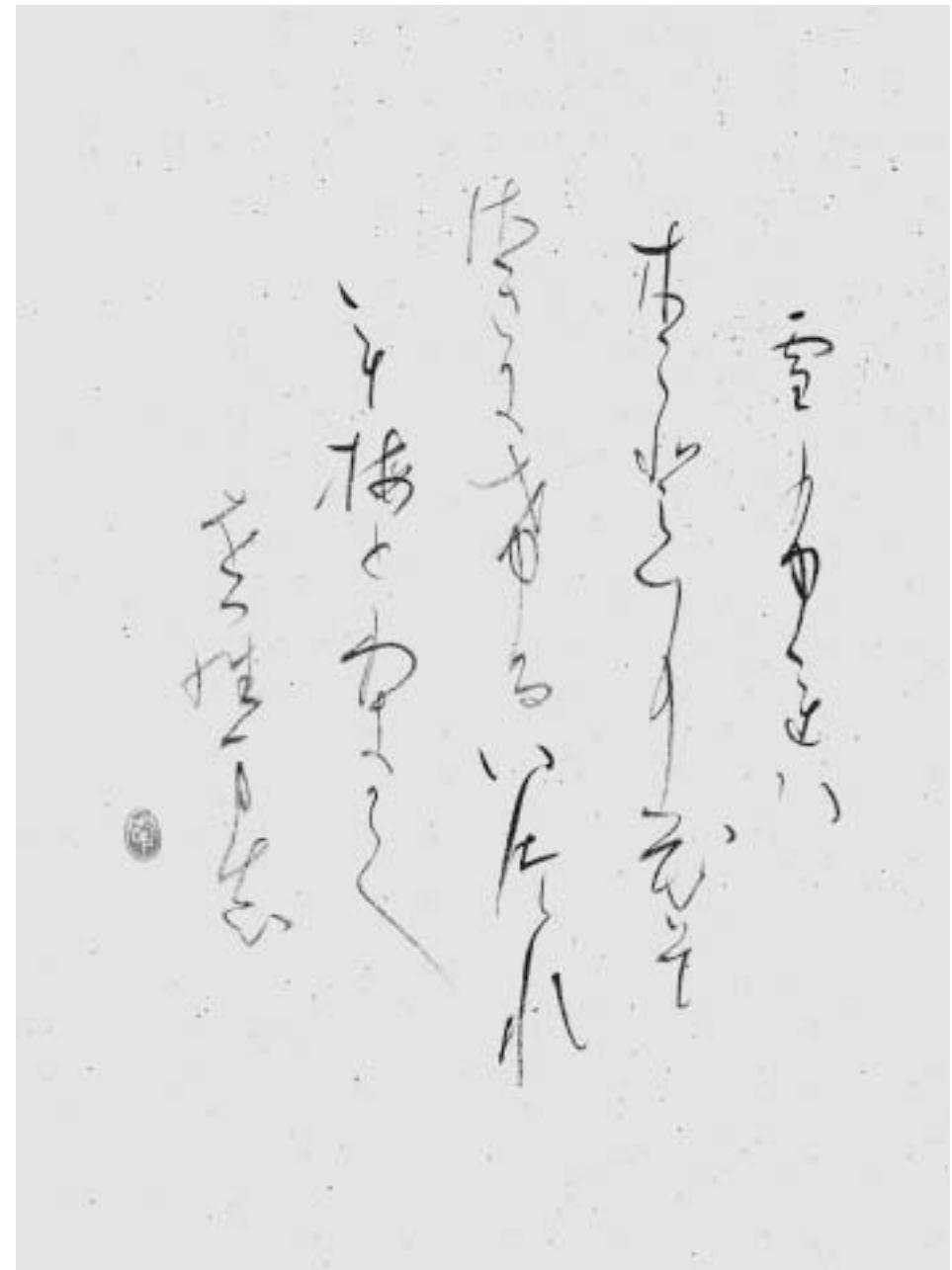
雪と梅の花をまちがえてしま
うという早春の美しい歌です。
第二句の木毎を合わせると梅とい
う字になると詠み込んでいます。
「吹くからに秋の草木のしをる
ばむ山風を風といふらむ」と同
じ技巧です。

散らしの構成には常に思いをめ
ぐらしますが、上下、左右、斜め
等の分割に依らず、一塊に書きま
した。書き進めながら、ゆるい構
図を作っていました。五行なら
ば句毎の書き分けも可能ですが、
とられすぎると作品に成りにく
いので、自由に考えたいものです。
出来上りが創りすぎを感じさせる
と煩しさになってしまいます。構
成は緻密に計算して、表現上はさ
らりと見せたいものです。行間を
考えて字を選びましょう。

よみ方

雪ふ(布)れ(連)ば(八)木(レ)と(登)に(耳)花(ソ)さ(佐)きに(尔)け(希)るいづ(徒)れ
を(平)梅と(支)て(四)を(羅)ま(万)し(志)

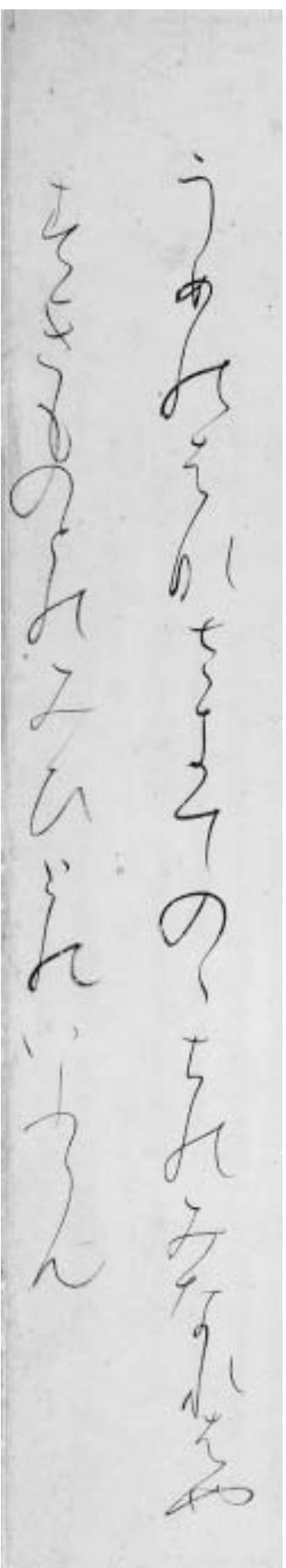
創作



かな規定 秀級以下【一月十五日締めきり】用紙 半紙タテ $\frac{1}{2}$ (料紙可) (たて32センチ・よこ12センチ)

掲載写真のうたを全體、または部分(二字以上の連綿)を臨書する。

高野切第三種
(掲載写真縮小93%)



よみ方 うめの(能)は(者)な(那)さき(支)ての、うちの(能)みなれば(者)や
す(春)きものとの(能)みひとの(能)いふらん

習い方解説 (一)

平川 峰子

かな条幅規定【一月十五日締めきり】用紙 小画仙紙半切(料紙可)

平川 峰子選書

浅綠^{あさみどり}よりかけて白露^{しらつゆ}を珠^{たま}にも
ぬける春の柳か
(僧正遍昭・古今和歌集)

墨書きは「春」にしましたが、「ぬける」でもいいと思います。
「浅綠」「白露」「珠」などの漢字をかな・変体がなに置き換えて自由に創作してみてください。

作者は「遍昭(照)」で出家前の名前は良岑宗貞(よしみねのむねさだ)。六歌仙・三十六歌仙の一人。桓武天皇の孫で、良岑宗世の八男。子に素性法師がいる。

創作

よみ方 浅緑いとよりか(可)けて白露を珠に(耳)も(毛)ぬけ(希)る春の柳か

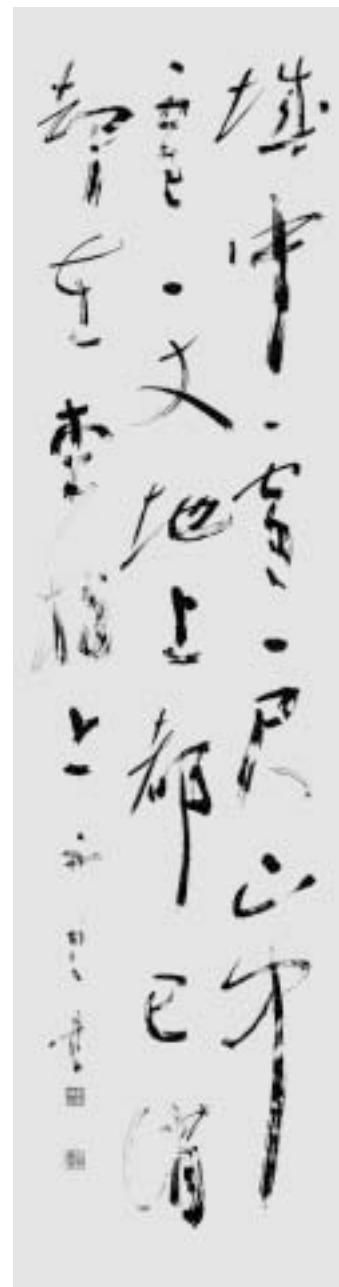
*たて形式に限る

漢字条幅規定 初段以上【二月十五日締めきり】用紙 小画仙紙半切

廣瀬舟雲選書

習い方解説 (四)

廣瀬舟雲



城中雪一尺

山中雪一丈

地上都已消

却在松梢上

(城中の雪は一尺、山中の雪は一丈、地上は都^{アリ}て已に消し、却^{アリ}て松梢^{スノコ}の上に在り)

書体=自由

久々の二十字の課題ですが、この詩文は「一・中」という易しい漢字が重複しているのでそんなに難易度は高くはありません。「中」の縦画を適度に伸ばしつつ変化と調和を図ってください。鶴毛筆を用いて、線の変化を意図しながら余白の白を雪に見立てて書いてみました。

「松」は「木十公」の異体を用いました。

漢字条幅規定 秀級以下【二月十五日締めきり】用紙 小画仙紙半切

横谷尚恵選書

習い方解説 (四)

横谷尚恵



今月からは一行書にしました。
十文字を選びましたが、十四文字の方が、構成の面でよかったです
思います。この詩の自然美を表現してください。

雪消山嶽露 日出海天清（雪消えて山嶽露われ、日出でて海天清し）

書体=自由

漢字条幅規定 初段以上【二月十五日締めきり】用紙 小画仙紙半切

横谷尚恵選書

雪消山嶽露

日出海天清

（雪消えて山嶽露われ、日出でて海天清し）

習い方解説(四)

川島舟錦

秋には光になつて
畑にうつそそぐ

冬にはダイヤのよつこ

きくらめく雪になつて

手の間に下りて「よ」舟錦か

『…………たしかに亡くなつた。だが今は光や雪や雨や風になつて、ゆうゆうと空を飛びまわっている…………。もしそんなふうに考えることができたらば、私たちの気持はどれほど楽になるとことだろう。……（略）』

（新井滿著『千の風になつて』講談社）より

行書体は、楷書体に比べて、緩急、抑揚、筆路もはつきりしています。今は、カタカナが出てきました。漢字（大）、ひらがな（中）、カタカナ（小）の大きさを心にとめて書いてみましょう。

※落款を入れ忘れないようにしてください。（落款は自分の名前を入れてください。）

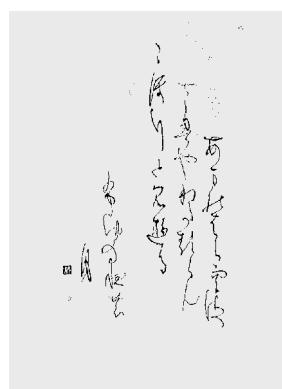
用紙＝はがきの大きさ、白色のもの、黒インク使用のこと

書体＝自由

ホープ作品
各部総評 No. 583

かな部 師範 米倉 聰香
 線やリズムに未消化な所もあるが、手本の字組みを基に散らしを変え、独自の作に近づいた好例。

◎かな部総評 の夜の連綿を理解せず、誤字となつた作散見。漢字かな共、文字の崩し方をよく確かめたい。墨色にも注意を。(洋子評)



かな条幅部 師範 橋本 紅霞
 歌意に添う叙情性が味わい深い。控えめな表現が美しい余白となり古典美と現代性の混在が見事です。

◎かな条幅部総評 全般に条幅の基本をよく把握し、上達が見られる。上級者の中に曖昧な字が多出る。常に確認のこと。(明子評)



漢字条幅部 師範 佐藤 桂香
 運筆のリズムよく、通貫した呼吸の流れあり。やや粗さも感ずるが大胆な筆致が動きを与えて妙。

◎漢字条幅部総評 書体、書風の選択は表現内容との関連で作品の仕上りに大きく影響する。月々の競書で様々な取り組みを。(春洋評)

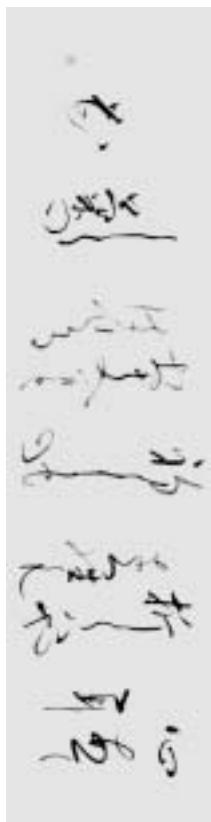


前衛書部 特選 三浦 律子
 紙面全体を使い、白と黒・太い線と細い線・直線と曲線のバランスがすばらしく豪快な作品。

◎前衛書部総評 濃墨・淡墨と表現も多種で個性豊かな作品が多くあり、審査が楽しい。(洞仙評)

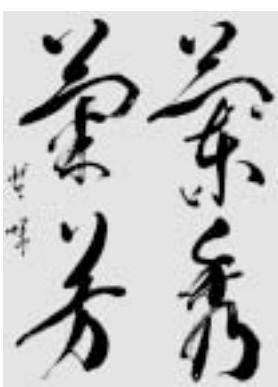
◎現代詩文書部 特選 日野 佳由
 ダイナミックな動きが空間を包み込み、現代的な叙情を演出している。

◎現代詩文書部総評 動きの大きな作品は魅力的。字形の正確さにもっと気を配りたい。(舟雲評)



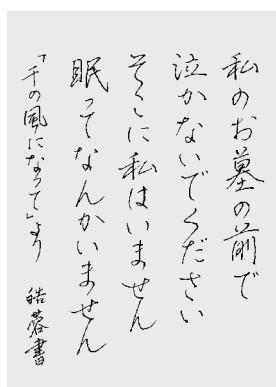
ペン字部 師範 井川 皓春
 悠々の運筆ペン構え大きく伸びやか、リズム感もすばらしい秀作落款少し斜めに曲り残念です。

◎ペン字部総評 伸びやかに、大らかに、氣字大の作に挑戦してみて下さいきっと良いものが生まれると思いますご精進を。(京華評)



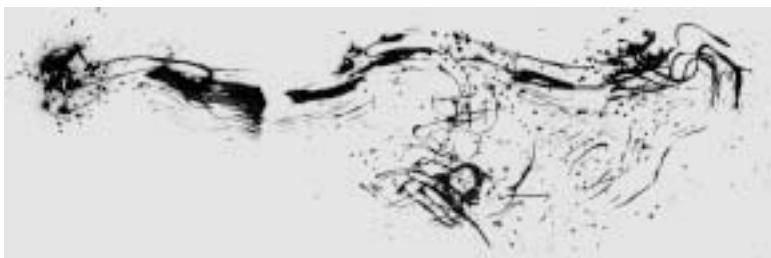
漢字部 師範 島貫 琴燁
 齒切れよい筆致がリズム感を醸し出し、字形の安定が落ち着きを見せて妙。落款も爽やか。

◎漢字部総評 上級草書表現作が多く見られたが字形不正確なもの散見。更に研究を。下級楷書は書風の多様な研究を。(大雲評)



今月の

特別研究作品（特選）



60×180cm

(蓮紅)
前衛書

一條紅蕭
「心氣」

◆ 細い線で構成した作品なのに一つにまとまって大きな動きを持って行ったのは新しい作品造りの世界が出来たのでしょうか。次も楽しみです。

(倫子評)

◆ 凝縮した左上部から右方へ広散される大きな紙面を構成して妙。やや右の墨の散らばりがうるさい。もう少し整理、省略してもよかったです。(明子評)

◆ 潤渴と字の大小で、二行を一行に見せ、左右の白を支配して面白い。余白が立ち止まらせ、組み合わせのリズムのよさが引き込む力です。

◆ 中央に固めた表現は手の内の手法か。渴筆が霧のようにやわらかさと深さを表している。少々バターン化されたかなが気になる。

(明子評)
(倫子評)

漢 墨宣 狩野 廣洲
漢 千葉 安藤 扇桜
漢 華祥 東原 廣洲
漢 大雲 阿部 華祥
漢 氏家 大隅 晃弘
漢 久光 平野 笛舟 秀水
漢 翠苑 千葉 恵泉 青蓮
漢 現 大雲 阿部 晃弘
漢 呈 現 大雲 惠泉 青蓮
漢 前 四谷 伊藤 前田
漢 現 千葉 四谷 伊藤 坂井
漢 か 千葉 卵月 新谷 初江
漢 もく 千葉 卵月 前田
漢 森田 浅野 嶋田 嵐泉
漢 藤谷 彩紅 淡野 彩紅
漢 藤谷 彩紅 淡野 彩紅
漢 藤谷 嵐泉 彩紅

（特選候補者）
（萬城）

年末に、71点（漢18、か8、現28、前17）の出品がありました。出品者、特選、特選候補者には、常連の名が多く見られます。その方々の毎月の熱心な創作活動に敬意を表します。書の学習は、鑑賞・表現・理論の三本柱が大切です。常日頃、良い芸術に触れ、手習いの時間を確保し、良書を漁り、鑑賞、表現、理論の力を養うことです。しかも、それを楽しむことです。論語に「これを知る者はこれを好む者に如かず。これを好む者はこれを楽しむ者に如かず。」とあります。審査結果に一喜一憂しながらも、創作活動を日々心から楽しんでください。（萬城）

（游水）荒川空華

現代詩文書

総評

一條紅蕭書

◆ 前衛書には、作品の完成度よりも斬新さを期待する。その意味で細い線のうるささはあるが新しいものへの挑戦という意味で大きな一步だろう。(蒼玄評)



荒川空華書
180×60cm

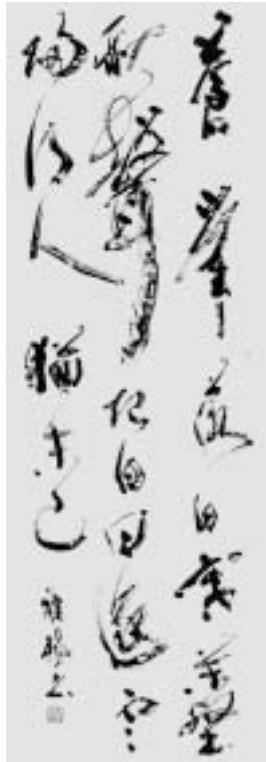


田子白嶺書

漢字
(恵雅)

板橋 雅邦

「蒼峯落日」



◆あー、こんな作品が書けたら、心は軽くなるのだろうな、と羨しく拝見しました。技術は心の高さでもあるかと内面にも接した思いです。(明子評)

53×174cm

かな (書泉) 田子白嶺

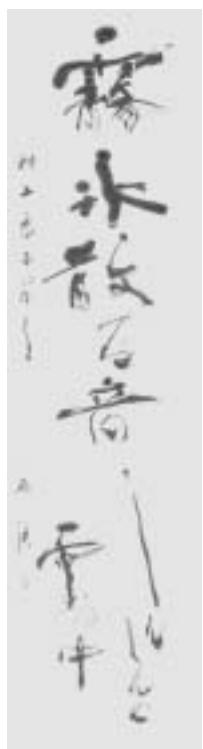
「草むらの虫の聲よ…」

◆強い線で、かなは繊細な表現ということを払拭し力強く強烈な表現となっている。後半の渴筆に変化があれば更深い作品になるのは。(蒼玄評)

◆気分大きな筆の運びその結果美しい線が生れて来たのか、その線の動きを生かすのに構成を考えて見るとっと大らかな作品になるのでは。(倫子評)

◆歯切れよい筆致がリズムを奏で、時間の明るさが爽やかな効果を生む。前半やや墨が重い感がするのは中央からの渴筆の甘さが影響か。(大雲評)

◆見応えのある立派な作品です。奇を衒うことの微塵もない真っ向勝負は爽やかです。この上は更に軽やかな会話を伺える個性を作品に。(明子評)



田中扇溪書

現代詩文書 (墨縁) 田中扇溪

「村上充子の句」

板橋 雅邦 書
180×60cm

◆潤渴が巧みで白が美しく輝く、二行目上部の「聲」も得て雄大な表現である。欲を言えば黒の深さがほしいがそれは今後の課題か。
◆筆のまとまりが実に上手なのに感心しました。筆先の細い線から力強く引いた太い線、そのバランスの取り方も見せ場で表現され生きている。
◆柔毫筆を二本組み合わせ、暢びやかな筆致で展開する技術の安定感と高さを感じる。中央部の大膽な表現が要となり広がりある作である。

◆字の巾をつける事で変化を表現したのが上手に生かされているがあまり変化をつけると重くなるのでは。下半分の構成が私は好きです。

◆やや硬めの長峰筆一本組か。破筆と潤筆の効果がリズムを奏でて動きある表現。墨色が冴えないため今一つの感あり。更に研究を。(大雲評)

◆字形の良さ巧みな構成で輝く作品となったのでしよう。きちんと書きながら漂う軽みは憧れるところです。過剰でないのが上品です。

◆破筆とにじみによりスケール感を出しているが、墨色が冴えないため深さを感じない。墨と紙は作品を支える重要な要素である。研究を。

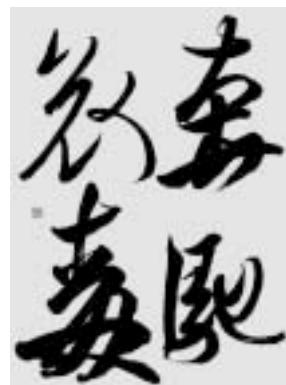
(蒼玄評)
(明子評)

162×42cm

漢字研究部
(喪乱帖)

選評 小伏小扇

今月のホープ作品



伊藤光子

漢字研究部 特選 伊藤光子
羲之が墳墓の地に墓参できない悲しみと、
お墓を荒された怒りにみちた情感がよく表現
された作品です。王法独特の造形上の特徴を
よく掴み、運筆にしたがって、かたちが整っ
ていく展開が見事です。

◎漢字研究部総評

王羲之の故郷である山東省琅邪が攻防の渦
中となり、不安定な国情の時期に近親のだれ



芳順辰友瑠青
香枝子夫里雲山

初白み裕和節
ど侑江慧り子子子

紫玉完香南赤
江泉治蘭汀紅

惠正紫昌佑谷
舟子泉子朋秀

かにあてた書翰と考えられます。用筆、造形
の多彩さ、毛筆の機能を極限まで使いきって
いる点など、臨書には難解な点が多くあります。
そのためか筆順のまちがいや、点画の不
正確な作品が多くありました。臨書の前に、
よく調べてとりかかってください。それから
喪乱帖節臨〇〇書と書かれた作品も沢山あり
ました。喪乱帖節臨〇〇か、〇〇臨のみで。